

頭髪に比べると眉毛は短い。頭髪はその気になればかなり長く伸ばすことが可能なのに、眉毛は高々1センチくらいで成長が止まり、伸ばそうと思ってもそれ以上は伸びてこない。ただし、このこと自体は不思議でも何でもない。恐らく頭髪と眉毛では成長の限界に差があるのだろうと察しがつく。すなわち、眉毛は一定の長さに達するとそれ以上伸びないという性質があるのだろうと想像できる。

不思議だと思うのは、眉毛はその一部を剃ったりハサミで切ったりしても暫くすると元の長さに戻るというこ

られた眉毛は再び伸び始めてはいなかったのだ。途中で切られた眉毛はしばらくそのまま残っていて、新陳代謝のサイクルに従っていずれ抜け落ち、そこに新たな毛が生え始め、成長限界まで伸びて成長を終える、ただそれだけなのである。毛先に精巧なセンサーがあって毛が切られたら再び伸び始めると見えたのは、眉毛全体を巨視的に眺めた時の単なる錯覚なのだ。

人間の身体における細胞の新陳代謝のスピードは思ったよりも速く、3か月もすると人間のほとんどの細胞が新しく入れ替わるのだという。外見は変わっていないの

数 | 理 | の | 窓

どうして眉毛を切ると元の長さに戻るのか？



とである。放っておけば一定の長さで落ち着くのに、一部を切ると切られたことに気付いてその部分だけ元の長さに戻るのである。何故だろうと疑問に思った人はいないだろうか。どうやって毛先が切られたことを毛根が察知できるのだろう。一見シンプルな構造に見える毛の中に如何なる巧妙な情報処理が隠されているのだろう。

学生の頃、友達との会話がきっかけで、そのような疑問が頭に浮かんだものの、今のようにWeb上で調べるといような手段も発達していなかったので深く考えもせず数十年が経ち、疑問自体も忘却の彼方であった。この忘れられた「宿題」を、最近、ふとしたことで思い出す機会があり、そのままにしておくのは気持ちが悪いのでWebで調べてみると、想定外の事実を驚いた。切

に中身はごっそり交代し続けているこの状態を、生物学者の福岡伸一氏は「動的平衡」と呼んで生物がもつ重要な特徴として注目している。眉毛の錯覚はこの「動的平衡」の動的な働きを見誤った結果生じたものと言える。

ビジネスの世界でも動的な働きに注意しないと思维判断ミスをしかねない。例えば、個人投資家の投信の平均保有期間が長期化してきた事実があったとする。この事実に対して政策の有効性を判断する際、既存の顧客の意識が変わって長期投資への傾向が出てきたのか、単に短期投資家が抜けて長期投資家に入れ替わっただけなのか、によって評価は異なるだろう。既存顧客の意識が変化すると安易に信じることは、眉毛にセンサーがあると信じるのに似ているかもしれない。(小粥 泰樹)